

第 15 分科会「里山と谷津守人」

シンポジウム・現地見学会「谷津守人の保全活動からカエル復活をみる」

日 時：2006年6月3日(土) 10:00~12:30

場 所

1. 基調講演 近隣センター「こもれび」
2. 現場報告 岡発戸・都部の谷津
「ホテル・アカガエルの里及び周辺の水辺」

参加者：54名



趣 旨

(主催者挨拶：我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会代表 木村 稔)

万葉時代は、野原を管理する人を「野守」と言ったが、かつて様々な生物がいた昭和30年代の岡発戸・都部の農村環境の復活のために活動している人たちを、私達は「谷津守人」と呼んでいる。最近、谷津の中で谷津田や畑づくりをはじめ、雑木林の手入れに汗を流す谷津守人を良く見かけるようになった。こうした善意が谷津の自然環境を守り育てていくものだと思う。

「皆さんも岡発戸・都部の谷津に足を運んでもらい、散策しながら谷津の楽しさを味わっていただくと、きっとこの谷津の自然を、私たちの子どもや孫の世代に残していきたいと思っていただけるとははず。」と参加者に呼びかけた。

基調講演 「谷津の自然の魅力とそれを守り育てるために」

浅間 茂 (千葉県生物学会調査研究部長)

動物がいなくなるのには、必ず理由がある。色々な生き物がいたら、その動物が何を食べているのか？なぜそこにいるのか・・・そういう視点で見るとその動物が現在どういう状態なのか、少しずつ見えてくる。

谷津の中にもニホンアカガエルのように、人が手を差しのべないと絶滅してしまうものがある。いったん絶滅してしまった動植物は、もう二度と戻らない。

ヒキガエルを大量に採っていくなど、自然をお金の対象にしている人が、最近たくさんいる。非常に残念である。「生物は、みんな結びついている。例えば虫の立場に たって、この虫は、何を食べて何に食べられ、どんな生活をしているのだろうと考えながら、谷津を散策してほしい」と谷津の自然の仕組みとその保全についてわかりやすく説明した。



現地報告 「ニホンアカガエルの復活：自然との共生の第一歩」

日向 正彦 (我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会運営委員・谷津学校卒業生)

岡発戸・都部のニホンアカガエルの産卵状況について概観し、その後、ホテル・アカガエルの里の水辺に場所を移動し、現場にて報告を行った。

ホテル・アカガエルの里では、ニホンアカガエルの産卵場所や卵塊数の変化を斜面林や水田、水辺の管理方法と関連付けながら詳細な報告を行った。また、ニホンアカガエルの産卵数の急増が、今年だけのものなのか、来年以降も続くのか、谷津の保全手法を研究・開発しながら、今後とも注意深く見守っていききたいとニホンアカガエルの産卵状況の概要を説明し、締めくくった。



結 論（卵塊数が飛躍的に増えた理由）

1. 草刈り

歩行者や観察のために訪れる人たちの自然観察を容易にすることやハケの道沿いの見通しを確保するため、水辺に繁茂するヨシ等の背の高い草を刈り取ったことにより、池の水面への日当たりが確保されたこと。

また、ハケの道沿いの草刈り作業をはじめたことによりカエルが斜面林側に移動できるようになったことで、今年は斜面林側にも卵塊が多く確認された。



現地での詳細な説明

2. 水辺の浚渫など

水辺の管理作業の一貫として、池の掘削や浚渫などを行い、産卵に適した水深が確保されたこと。

まとめ

1. 水辺の水深について

卵塊が確認された水辺の水深を測って見ると「2 cm～16 cm」であることがわかった。特に「5 cm～8 cm」の深さの層で最も多くの卵塊が確認されている。

このため、水辺の浚渫に際しては、この水深を保持していくことが必要である。



水辺の維持管理について説明

2. 卵塊保護のための草刈り

ヨシ等の植物が水面から 10 cm 以上ある場所では、卵を捕食する鳥も入りづらいのか、無傷の卵塊が多かった。

草の背丈が低い場所や草の少ない場所では、ほとんどの卵塊が無惨に散らかされていた。

また、孵ったオタマジャクシもほとんど食べられてしまった。このため、次年度は草の背丈と被害の状況を更に調査したい。



土水路づくりやその配置について説明

まとめ

維持管理が効を奏し、谷津の生きものをとりまく環境は年々よくなってきている。

しかし、現在管理している田んぼや水辺は谷津全体のほんの一部にすぎない。カエルだけでなく谷津守人を増やしていくのも今後の課題である。